

ヒッグスの「神の粒子」と高木兼寛の「霊子」

昨年（平成二十四年）七月、新しい素粒子の発見が報告された。素粒子とは宇宙を構成する物質の最小単位のことであるが、これまでに十七種が想定され、すでに十六種が確定されているという。このたびの発見は最後の十七番目の素粒子に当たるわけである。かつてピーター・ヒッグスが理論的に予言し、五十年もかかってやっと国際的プロジェクトによって発見されたのである。ノーベル賞級の大成果であるという。

このヒッグスの粒子の働きは他の素粒子に質量を与えることであるらしい。宇宙が生まれた瞬間には、すべての素粒子が質量をもたないため、光のようにただ飛び交うばかりで、われわれが知っているような多様な物質には成りえなかった。つまりヒッグス粒子のおかげで素粒子は質量をもち、減速し、集合して、われわれが知っている多様な物質、物体に発展したのだというのである。

このような働きのためヒッグス粒子はしばしば「神の粒子」と呼ばれる。他の素粒子の性格を決定づける神秘的な意味をもたせるためである。

「神の粒子」についてのこのような記事を読んでいるうちに、筆者はふと、むかし高木兼寛もこれに似たような粒子の存在を提言したことがあったことを思い出した。高木は晩年、[禊の行]という古神道を信仰し、その内容について自著「禊に関する神事の概要」にまとめているが、その中で彼は次のような独自の物質観を披露しているのである。

「天地間の万物はすべて原子よりなり、さらにそれは原子核と電子に分解されるというが、もし余の信ずるところを忌憚なく言わしむれば、学問の進歩は意外に速いもので、これもいづれさらに小さい幾百万億億

の「霊子」よりなることが明らかになるであろう。

しかしてその「霊子」なるものに宇宙の本体たる天御中主大神の分霊なることを想定するならば、霊子自体の主観は精神的実体となり、その客観は物質的粒子になるのではなかろうか」と。

当時は長岡半太郎の原子模型が知られており、物質は原子核とそれを取り巻く電子より成るとされていたが、高木はさらにそれを構成する霊子なる小粒子を提案して、精神界、物質界の発生を説明しようとしているのである。

筆者はこうしてヒッグスの「神の粒子」と高木の「霊子」を並べることになったが、とくに興味をひいたのは、両粒子の間にはすでに百年の歳月が流れており、素粒子の概念もすっかり変わってしまったのに、共通してそれぞれの原子構造のなかにどこか神霊的な隙間を設けて神の働きをみとめようとしている点であった。